

10 月第 2 週の礼拝説教

■日 時：2025 年 10 月 12 日（日）10：30～11：30 聖霊降臨節第 19 主日礼拝

■説 教： 保科けい子牧師

■聖 書：新約：マタイによる福音書 20 章 1～16 節（新約 P38）

■説教題：「自分の分を受け取って」

■讃美歌：3（扉を開きて われを導き）

511（光と闇とが 戦うこの世、）

今週も、AIで録音し文章にしてくださったものを書き言葉にしています。自分では約3000字ぐらいを目指してあらかじめ説教原稿を作成しておりますが、AIでは5000字以上でした。

本日の聖書箇所はよく皆さんご存知のところですよ。朝のジュニア礼拝の時に生徒たちに尋ねましたら、ほとんどの生徒が知っていました。それほど有名な箇所なのです。ところで、カトリックのローマ教皇庁から「バチカンニュース」というサイトが開かれています。2013年3月13日から2025年4月21日まで在位されたフランシスコという教皇がおられました。その教皇が2023年9月24日にバチカンで日曜正午の祈りの集いを持たれましたが、その時の説教が文章の形で表示されているサイトを見ました。その聖書箇所がマタイによる福音書20章1節から16節でした。次のように語られている箇所があります。「このたとえで気づくべきことは、働いているのは人だけでなく、むしろ神ご自身であるということである。神は疲れることなく、あらゆる時間に外に出向いていかれる。神は私たちに会う前に、努力を要求したり、能力や手柄で判断することはない。私たちがすぐに答えなくても、あきらめることがない。むしろ、神は行動を起こされ、私たちにご自身の愛を示そうと、イエスを通して『出かけられた』のである。神は私たちを一日のすべての時間において捜される。それは聖大グレゴリオが言うように、高齢に至るまでの、私たちの人生のあらゆる季節、様々な段階を表している。」これを読んで、私はそれまでの「『ぶどう園の労働者』のたとえ」を自分なりに読んでいたイメージを大きく変えられた思いがいたしました。このたとえは、「天の国は次のようにたとえられる。」と話し出されたたとえ話ですから、「ある家の主人」というのは、天の国の主である神をたとえていることは明らかです。しかし、私が注目させられたのは、教皇フランシスコが、「神は行動を起こされ、私たちにご自身の愛を示そうと、イエスを通して『出かけられた』のであると語られているところです。主イエスと神との関係がはっきりと打ち出されています。今までの私は、このたとえのどこに主イエスがおられるのかということについて、あまり深く考えることがなかったことに気づかされました。

一般的にこのたとえで注目されるのは、夜明け、朝の九時ごろ、十二時ごろ、午後三時頃、そして午後五時頃に、同一賃金で雇われた人たちがいたということです。夜明けというのは午前五時ごろということをおぼえて、彼らが働いたのは13時間、最後の午後五時に雇われた人たちは、もうすでに日暮れでしたから一時間ぐらいしか働けなかったでしょう。働いた時間はそれぞれ違うのに、どの人たちも一デナリオンずつ受け取ったという状況がここで記されています。10節には、「最初に雇われた人たちが来て、もっと多くもらえるだろうと思っていた。しかし、彼らも一デナリオンずつであった。」とあります。一デナリオンというのは、聖書の後ろにある「度量衡および通貨」の表を見ていただくと、大人の男性の1日の賃金と考えられる金額です。この話を表面的に読んでしまうと、本当に不公平なことがあるな、こんな不公平なことが現実的にあったら嫌だな、と思われるかもしれ

ません。ですから、最初に雇われた人たちが、私たちは長い時間汗水流して働いたのだから、後から雇われた人たちよりも多く賃金をもらえるのは当然だろう、と考えたのはごく自然の成り行きだったと思います。なぜなら、最初に雇われた人たちから賃金を払われたのではなくて、夕方五時頃に雇われた人たちが来て、一デナリオンずつを受け取った場面を見ていたと思われるからです。あの人たちは一時間しか働いていないのに一デナリオンをいただけたのだから、自分たちは朝早くに雇われたので彼らの12、3倍は働いた、だからもう少したくさんいただけたらと思ったのでしょうか。それで、一デナリオンの賃金を受け取ると、主人に不平を言ったのです。不平の内容は、「最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いた私たちと、この連中とを同じ扱いにするとは。」ということでした。私たちが日ごろ考えることはまさにこの通りです。私たちは日常的に他の人といろいろなことを比べています。同じような仕事をしている人と比べる、同じような生活をしている人と比べる、そうすると、私の方がたくさん仕事をしているのにどうしてこんなに報われないだろうか、と思うのです。あるいは、もう仕事を辞めてそれなりに暮らしている方は、私はこの何十年という間、本当に一生懸命に働いて頑張ってきた、しかし、私よりも働かずのほほんと暮らしていた人たちが私よりもはるかに豊かな生活をしている、快適な生活をしている、それは不公平ではないかと考えてしまうことと同じです。ですから、本日の聖書箇所に書かれている雇われ人が不満を言うことや主人に抗議をするのは当然であると思うのです。その抗議に対して主人は答えました。13節の二重かぎの中に『友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたはわたしと一デナリオンの約束をしたではないか。自分の分を受け取って帰りなさい。わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。自分のものを自分のしたいようにしては、いけないか。それとも私の気前のよさをねたむのか。』とあります。ここで主人が、彼に抗議した人に対して「友よ」と呼んでいることに注意したいと思います。決して、主人が不平等に扱ったり対立するような思いで雇い人たちと話しているのではないことがわかります。主人は彼らに対して、私の言うことをわかってほしい、私の思いを受け止めてほしい、と心から願って穏やかに語ったのだと思います。確かに主人は、自分が雇う人すべてに、一日一デナリオンの賃金を払うと約束していたのですから、雇われた人の誰に対しても、決して不当なことはしていなかったのです。

これは、天の国のたとえ話です。神を信じるということはどういうことか、あるいは、神に出会う、主イエスに出会う、ということはどういうことかということを語っていると思います。このたとえ話をしておられるのは主イエスですから、ここに出てくる「ある家の主人」というのは、当然、神です。そして、主人の「ぶどう園で働く労働者」というのは、私たち一人ひとりを指していると考えられます。一日一デナリオンの賃金というのは、私たちが一日生きていくために必要な神の恵みというふうにも考えることができます。ところが、最初に「雇われた人たちは、神の恵みを一般的な報酬と考えたわけですが。神の恵みではなくて、それは私の労働に対する対価であると考えたわけですが。対価とは、自分の働きに見合った賃金ということもできます。世の中の仕事の場合は、雇われる時に、あなたにはこういう働き方をしてもらいます、一日何時間でこれだけの賃金を払います、という約束を交わして働き出すわけです。しかし、天の国、神の恵みということでは、私たちはこれだけ働いたのだから、その働きに応じて天の国に必ず入ると約束されているというのではないのです。ぶどう園の主人が、どの時間から働いた労働者に対しても、一日一デナリオンを支払ったように、私たちの信じる神は、一人ひとりに対して、生きるために必要なものをそれぞれ等しく与えてくださる、そういうお方です。朝五時から働いた者は、一日中一生懸命に働いて一日生きるための賃金を得る、そういう働き方をしたのだと思います。けれども、雇い主が労働者を集めに来る場に朝から立っていても雇っ

てもらえず、夕方五時頃まで立っていてやっと雇ってくれる主人に出会った、そういう人もいると思います。彼らに対して、夕方からの一時間なのだからわずかな賃金でよい、と考えると支払われたら、彼らの次の日の生活は成り立たないかもしれません。もちろん、雇われなければ、次の日の生活は保障されないわけですが、神の国、天の国というのは、今がこうだから明日はこういうふうになるというように具体的な約束をして与えられるものではない、と私は思っています。このたとえ話を読むたびに、天の国は本当に私たちが必要なための賃金を与えてくださるところであると考えています。だから、朝早くから一生懸命に長時間働いた人も、非常に重労働をした人も、あるいはもう働けなくなって座っているだけでよいと招かれた人も、皆同じように神の恵みというものが必ず与えられる、そういうことをここから私は読むことができると思うのです。

ここでの、主人の「私の気前のよさをねたむのか」という発言の中の「気前のよさ」という言葉は、善悪の善という場合の「善い」という言葉です。そして、私たちは神のなさる善いことをアーメンと言って受け入れているはずですが、ところが、私たちは、誰か他の人が隣にいと、しかも、私と同じような立場で隣り合ったりすると、その人と自分を比べます。例えばよく言われることですが、相手の頭からつま先までを見て、「あ、この人よりも私の方が今日はちょっと良いものを着ている」とか、「この人よりも私の方がちょっと良い生活をしている」などと思いがちです。あるいは、「この人と私を比べてみると、私は非常にみじめだ。私だけどうしてこんなに恵まれない生活をしているのだろうか」などと、人が二人並ぶと必ずそこで比較が起こります。その人と自分を比べるときに、相手を目上とか目下とか、豊かとか貧しいとか比べてしまうところに、必ず妬む思いが出てくるということを、本日の箇所からはしみじみ思われます。妬むという言葉は、マタイによる福音書6章23節にある、目が「濁っていれば」という言葉と同じです。心の目が濁って見えなくなっている、それは神の恵みを見失っているということです。それが妬むということにつながっているというのですから、非常に面白いと思いました。また、ローマの信徒への手紙12章15節に「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」という有名な言葉があります。私たちはこの御言葉を聞くときに、泣く人と共に泣くことは自分にもできると考えます。私の隣りの人が悲しんでいる、あるいは、今世界中を見渡すと悲惨な状況があらこちらにある、そうすると、どうしてこんなひどいことが起きているのだろうか考える人々と共感して涙を流すこともできます。ところが、「喜ぶ人と共に喜ぶ」ことを、本心から私たちはできるのでしょうか。私の隣にいる人が、何かとても良いことがあって全身から喜びを発散している時に、自分自身も喜びにあふれている状態であつたら、共に喜ぶことができます。しかし、自分が本当に惨めな状況にあつたり、悲しいことで苦しんでいた時に、隣にいる人が喜んでいたら、心の目が濁って来てその人を妬むという感情が出てくるような気がします。「私の気前のよさをねたむのか」とぶどう園の主人が言っている状況は、そのように解釈すると、私たちも納得できるのではないのでしょうか。そして、このたとえば、「後にいる者が先になり、先にいる者が後になる」と締めくくられています。主人が言う「後にいる者」とは、14節の「この最後の者」のことです。私たちは自分の力で生きている、頑張っていると思うときには、自分が夜明けに雇われた労働者であつて、他の人よりも何倍も働いたと自負してしまっているのではないのでしょうか。つまり、「先にいる者」というのは、ある意味そういう人を指していると思います。もう一度繰り返しますが、それに対してぶどう園の主人、つまり、天の国の主人である神は、「友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたはわたしと一デナリオンの約束をしたではないか。自分の分を受け取って帰りなさい」と語っておられることを、本当に恵みの言葉として心から受け止めていきたいと思います。

お祈りをします。

主なる神様、今日は有名なぶどう園の労働者のたとえをご一緒にこの礼拝で読むことができました。あなたが私たち一人ひとりに朝の明け方から働く者も、夕方になって一時間ぐらい働く者も皆、同じ一デナリオンで雇ってくださるお方であるということを、心から素直に受け止めることができますように。そういう中で歩いていくときに、私たちが人を妬んだり、あるいは世の中全体を妬んだりする、そういう思いから解き放たれていくことを、あなたが教えてくださっている、そのことを深く覚えることができますように。この祈りを主イエス・キリストの御名によってお捧げいたします。アーメン。